

Title	現代日本語の「とりたて助詞」
Author(s)	澤田, 美恵子
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/58802
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名	澤田 美恵子
本籍 (国籍)	
学位の種類	博士 (言語文化学)
学位記番号	乙 第 5 号
学位授与年月日	平成19年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当 論文博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	現代日本語の「とりたて助詞」
論文審査委員	主査 教授 仁田 義雄 副査 教授 三原 健一 副査 教授 小矢野 哲夫 副査 教授 田野村 忠温 副査 教授 鈴木 睦

論文の内容要旨

日本語は、第2言語として学ぶ人たちに、もっと開かれていくべきであるという信念をもっている。「とりたて助詞」は、感情の様々な局面を表すことができ、うまく使用することによって、微妙な心の動きを描写することができる。そういった繊細なものであるがゆえに、第2言語として日本語を学ぶ人たちにとって、習得しにくいものである。

本稿で、他言語と対照することにより、「とりたて助詞」は、日本語が母語でない人たちにとって、彼ら、彼女らの母語では文法的な形式として対応するものがない場合も多くあることがわかった。このような場合は、語用論的なアプローチや認知言語学的なアプローチによって、使用場面と使用意図が理解できる教材が必要となってくる。ところが、現代までの日本語教育の教材で、こういった助詞をわかりやすく解説し、習得させるための教材さえ、ほとんどないといって良いだろう。それは、また適切な研究がなされていないということでもある。

実際、「とりたて助詞」の個々の研究においては、認知言語学的なアプローチや他言語との対照研究も行われてきたが、体系的な「とりたて助詞」の研究では、認知言語学的なアプローチや対照言語学的なアプローチは、まだ行われていない。本稿が、はじめての試みとなると思われる。また、特に多言語との対照研究を取り入れた「も」の分析や、否定文・条件文と「とりたて助詞」との相互作用を明らかにした研究としては、本稿で最先端の議論ができたと考えている。

本稿では、「とりたて助詞」の曖昧な表現の意味を明らかにし、これらの助詞の様々な意味が論理的に、または規則性をもって分化していることを探った。「とりたて助詞」の様々な意味が、どのように分化しているのかを、少しでも論理的に説明することができたなら、他言語との対照研究も、今後少しは容易になるのではないかと考えたのである。本稿が最

も主張したかった点は、ある助詞が、基本的な意味をもち、それが、否定、条件、文末のモダリティ表現との相互作用によって意味が変化すること、また発話現場における「繰り返し発話」や、詠嘆や驚嘆を伴う現前性の表現は、異なった意味が加味されることである。意味の分化は、けっしてランダムなものではなく、条件によって分化するのであれば、日本語の母語話者でなくとも、研究することは容易になり、対照研究ももっと豊かになっていくことであろう。こういった研究が進めば、それを応用した日本語教育の教材も多く生み出されると思われる。

本稿では、序章で「とりたて」という概念がどのように創出されてきたを述べ、第1章では、認識的判断に関わる「も」「でも」「さえ」について、第2章では、限定に関わる「だけ」「しか」「ばかり」について、第3章では、評価的判断に関わる「こそ」「など(なんか)」「なんて」について、対照集合、EXPECT 値のスケール、PREFER 値のスケールといったカテゴリー概念を使って、認知言語学的アプローチや他言語との対照を通して考察した。そして最後に、終章でまとめと日本語教育への応用の可能性について述べた。次に本稿の中心となる第1章、第2章、第3章の主張を述べたい。

人は、外界において新しく認識したものを、分類し、同類性を見出し、自分の信念内のカテゴリーに累加していく。このような基本的な営みを表現しているのが「も」であると思われる。そして、思いもかけないものが、あるカテゴリーに属することがわかった時、「も」を使用して、カテゴリーに累加しつつも、それが話し手にとって意外であったことを表示することもできるのである。また、ある対象について、新しい属性を見出し、今までとは異なったカテゴリーに累加する時にも「も」を使用することができた。この発話現場での新しい属性の発見は、詠嘆性を表現していた。

「も」「でも」「さえ」など認識的判断に関わるとりたて助詞は、命題が成立するにあたって、話し手が期待・予測しがたかった要素か、期待・予測しやすい要素かを表示していた。たとえば、「も」「でも」「さえ」を使用して、期待・予測しがたかった要素が、命題を成立させたことを驚きの念をもって表示することができた。しかし、否定、条件の作用を利用すると、含意関係を逆転させることができるため、「さえ」を条件文の前件に使用して、命題成立の条件としての意中の要素を表示したり、「も」を使用して、聞き手が期待・予測して提示した要素を否定することができた。

限定を表す「だけ」「しか」「ばかり」の分析からは、それぞれの助詞を使用する場合の話し手の事態の認知の仕方が異なっていることがわかった。「だけ」を使用して限定を表す場合は、「だけ」で提示した要素や範囲が、話し手にとって明確で、それが命題を成立させるか否かを表示していた。「しか」の場合は、命題が成立する前に、話し手が期待・予測した要素が成立しないで、その他の要素が成立したことを表示していた。ゆえに、成立した

要素が、たとえ話し手にとって不明確な要素であっても使用できるのである。この「だけ」と「しか」の相違点は、条件文の前件におかれた場合に顕著になった。また条件文の前件に「とりたて助詞」がある文の否定の形を考えることから、「だけ」の場合は後件が否定の譲歩文となり、「しか」の場合は後件が否定の条件文となることがわかった。

「ばかり」が「だけ」と「しか」と異なる点は、話し手の認知の仕方に、時間の概念が関係する点である。それゆえ、「ばかり」を述語に使用すると、アスペクチュアルな表現が可能なのである。

また、「ばかり」が主格名詞句に使用される場合は、話し手は「も」と対照的な認知の仕方をしていることを明らかにした。話し手が、ある期間、外界を観察して、変化を見出し、その変化を認識することによって、ある対象に新しい属性を付与する場合は、「も」を使用する。そして、ある対象を、新たに再認識し、カテゴリー体系が変化したことを表現するのである。これは、Langacker(1987)の累積走査という過程と似ていると考えられ、外界観察の結果を主観的に受け入れたと考えられるだろう。一方、ある期間、外界を観察して、変化がないと感じた場合は、「ばかり」を使用する。そして、明示した命題が印象として強く残り、変化がないことを表す。これは、Langacker(1987)の連続走査という過程に似ていると考えられ、外界観察の結果を、観察から受けた感覚をそのまま、完全ではないが客観的に表現していると考えられる。この相違点は、対象を再認識する「も」が主題を表すものと位置づけられる場合があることとも関係するだろう。「ばかり」は、その視点から見れば、現象描写文に近い性格を持つと言えるだろう。

「こそ」については、問題となっている命題を成立させる要素として、話し手が最も適切であると評価する要素を提示して、主張している用法と、逆接節に「こそ」を使用して、話し手が主張する命題には、「こそ」で提示した条件は、重要でないということを表す用法について考察した。あるスケールの含意関係を逆転させるのに、逆接という作用が影響することがわかった。

「など(なんか)」については、問題となっている命題を成立させる要素として、話し手が適切でないと評価する要素を提示して、主張している用法と、問題となっている命題を成立させる要素として、話し手が適切であると評価する要素を提示しながらも、聞き手に選択肢を与え、語用論的配慮により断定を避けている場合があった。

断定をしているか、断定保留しているかという文末のモダリティの異なりが、「とりたて助詞」の解釈に影響を与える場合は、他に条件文の前件の数量詞+「も」や、一般名詞+「でも」でも同様であり、文末のモダリティと「とりたて助詞」を相互作用させて、話し手は発話意図を明確にしているのである。

「なんて」については、「など(なんか)」と同様に解釈できる場合もあるが、「なんて」しか使えない場合がある。「なんて」を使用する場合は、二つの時空間が話し手の中で、比

較されていると思われる。

本稿は、「とりたて助詞」を使用する話し手が、何をどのように認知し、何を表現したいのかを、他言語でも応用できる道具立てを使って考察した。その中で、基本的なことではあるが、ある文を発話する意図はその文全体を貫いており、「とりたて助詞」を使用する話し手は、文中の様々な要素と「とりたて助詞」を協働させながら、話し手自身の「想い」を表現していることがわかった。「とりたて助詞」の研究は、そのものの機能や意味を明らかにするだけでなく、文の他の要素とどのように連携しているのかを、明らかにすることが大切であると考えられる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、いわゆる「とりたて助詞」の主要なものを、認識的判断に関わるもの、限定に関わるもの、評価的判断に関わるものに類別し、それらに属するとりたて助詞の意義・用法について分析・記述したものである。認識的判断に関わるとりたて助詞には「も」「でも」「さえ」が、限定に関わるとりたて助詞には「だけ」「しか」「ばかり」が、評価的判断に関わるとりたて助詞には「こそ」「など(なんか)」「なんて」が所属させられ分析・記述を施されている。

とりたて助詞という名称は、宮田幸一『日本語文法の輪郭』の提唱による。とりたて助詞という名称提唱以前の山田孝雄の時代から、この種の助詞に対する分析・記述の蓄積にはかなりのものがある。ただ、とりたて助詞の研究にあっては、文法分析・文法記述と言いながら、個々の助詞の意義・用法の記述という辞書的な分析・記述の段階に止まっているものが少なくない。とりたて助詞は、体系的・組織的な分析・記述の難しい分野である。したがって、とりたて助詞の分析・記述にあっては、総体をどのように組織化し、文法的な分析・記述と言うにふさわしい体系的な分析・記述を行っていくかが、大きな課題になる。賛否はあると思われるが、当該下位種への個々の助詞の所属のさせ方を含め、本論文での、認識的判断に関わるとりたて助詞、限定に関わるとりたて助詞、評価的判断に関わる助詞、という類別は、とりたて助詞の組織化・体系化への一つの試みと提言であると言えよう。まずその点が、とりたて助詞を分析・記述の対象としている本論文の評価すべき点である。

分析・記述が組織立った体系的なものになるためには、分析・記述のための枠組み・道具立てが準備されていなければならない。本論文では、対照集合や、命題の成立不成立の可能性に関わるE値(期待値)、命題に対する話し手の価値判断に関わるP値(適切値)、およびそれらをスケールとして捉える、などといった分析・記述の道具立てが提出されている。そのような分析・記述の枠組み・道具立てを使うことによって、本論文は、とりたて助詞が示す多様な意味の現れを体系的・組織的に位置づけることによりかなりの程度において成功している。つまり、とりたて助詞それぞれに対して、単純な基本的な意味を設定し、それが、否定、条件、文末のモダリティ表現などとの相互作用によって、様々な意

味に変容すること、また現場性がとりたて助詞の多様な意味の現れに関与していることなどを、理論的に記述・説明をしている。この種の姿勢でのとりたて助詞の分析・記述の本格的な試みは、本論文が初めてであろう。分析・記述のための枠組み・道具立てを用意し、多様な現れをすとりたて助詞の意味を、有機的に連関づけながら組織的に分析・記述することを試みたことが、本論文の評価すべきもう一つの点である。

言語研究・文法研究で大事なことの一つは、言語事実・文法事実の掘り起こしである。本論文は、従来気づかれていなかった言語事実・文法事実の掘り起こしをかなり行っている。たとえば、「?この家では太郎ばかり賢い。」「隣の家ではお母さんばかり忙しい。」などの逸脱性・適格性への指摘なども、言われてみれば当たり前のことではあるが、従来さほど明確に気づかれていたとは思えない。この事と関連し、複数回の生起がない<恒常的属性>と複数回生起する可能性のある<状態>を取り出し、その事と、何かについて観察し、その結果、「バカリ」が明示している要素しか存在しなかったことをいう、という「バカリ」の基本的な意味との関係から、上記二つの文の逸脱性・適格性に対し、的確な説明を施している。新しく掘り起こされた文法事実をも十全に説明できるようにすることで、分析・記述の枠組みも改良され、説明も適応範囲が広く的確なものになっていく。文法研究の命ともいべき新しい文法事実の掘り起こしが行われている点が、本論文の評価すべき点のさらに一つである。

また、分析・記述の対象に対して明示的・組織的な分析・記述を試みることによって、本論文は、提供する説明を、非母語話者にも理解可能な分析・記述にすることを心がけている。非母語話者にはなかなか理解されにくいとりたて助詞の意味の多様な現れを分析・記述の対象とする本論文であれば、なおさら非母語話者にも理解可能な形で分析・記述しようとする姿勢は、重要でもあり、本論文の評価すべき点である。

本論文の執筆者は、最近出版された日本語教育学会編『新版・日本語教育事典』(大修館書店)において、「とりたて」に関わる項目をいくつか執筆しており、また、日本語文法学会が編集中の『日本語文法事典』(大修館書店)にも同領域でいくつかの項目の執筆を依頼されている。これは何よりも当該学会が同人の研究業績を「とりたて」研究として第一線を行くもの、同人を、現在の代表的な「とりたて」研究者の一人として認めたことを示している。

もっとも、本論文にも、いくつかの問題点、今後に残された課題は存在する。E値やP値という概念・道具立てでのとりたて助詞の分析・記述総体を有効的に分析・記述することが本当にできるのか。分析・記述の道具立てをさらに洗練していくことが必要になるのではないだろうか。また、「モ」については、考察が多様な用法にまで及んでいるのに対して、「バカリ」については、アスペクト的な用法への言及はあるものの、たとえば「1万円ばかり送った。」などでの「バカリ」は、今後の課題として残されているし、「これくらいいたしたことはない。」「彼ほど悪い奴はいない。」などの、「クライ」「ホド」は、どのようなとりたて助詞として定立されるのか触れられていない。

今後に残された問題は存するものの、それは、論文というものの宿命であり、本論文の価値を損なうほどのものではない。

これらのことを総合的に判断し、本審査委員会は、本論文が博士（言語文化学）の学位を与えるにふさわしい論文であると判断した。